

第1回 富山県経済・文化長期ビジョン懇話会 議事要旨

1 日時：平成27年10月16日（金）16:00～18:00

2 場所：県民会館8階バンケットホール

3 出席委員（五十音順）

神野特別委員、田中特別委員、中西特別委員、橋本特別委員、朝日委員、稲垣委員、梅田委員、遠藤委員、可西委員、神川委員、河合委員、川村委員、杉野委員、高木委員、田中委員、中井委員、永原委員、水口委員、吉田泉委員、吉田忠裕委員、綿貫委員（代理）

4 議事

- （1）策定の趣旨、策定の進め方、スケジュール
- （2）橋本特別委員「富山県の長期ビジョン策定に向けて：国の成長戦略から読み解く」
- （3）意見交換

5 発言要旨

（1）開会挨拶 石井知事

- ・ 北陸新幹線の開業の勢いを一過性にしないでしっかり持続させて、新たな富山県の発展、飛躍につなげていかなければならない。人口減少対策を含めた地方創生ということを経国の重要政策の一つにしていただくことができた。この北陸新幹線開業と政府の地方創生戦略の二つのフォローの風をしっかり生かして、富山県の新たな未来をつくっていききたい。
- ・ ただ、地方創生については、5年間の計画であり、これと並行して、富山県の10年先、20年先、30年先を展望して、一方でグローバル化も一層進んでおり、富山県の経済・産業の繁栄があつてこそその県政の発展ということでもある。また、経済力と併せて、これからは文化の力で日本国の再生・再興を図っていかねばいけない。さらに、日本経済と文化を担う人づくりも大切である。そうした思いで、富山県経済・文化長期ビジョン懇話会をつくらせていただいた。
- ・ 富山県の長期ビジョンについて、忌憚のないご意見を通じ、富山県の新しい未来をつくっていく。また、そのことを通じて、今、日本の再興・再生が大きなテーマであるが、地方の県である富山県も日本の再生・再興の一翼、一端を担う県として、しっかり次の世代に継承、発展させていく確固とした基盤をつくっていききたい。
- ・ この懇話会の会長は、富山大学の遠藤学長にお願いさせていただきたい。

（2）橋本特別委員からのプレゼンテーション

「富山県の長期ビジョン策定に向けて：国の成長戦略から読み解く」

別添資料に基づきプレゼンテーション

（橋本特別委員）3年前に安倍政権ができてから、産業競争力会議と総合科学技術・イノベーション会議の議員を仰せつかっており、ずっと成長戦略の策定に関わってきた。

#2

- ・ 30年先という非常に長期のビジョン、30年という設定は微妙な良い設定だと思う。
- ・ このペーパーは安倍政権が最初にできたときに、どういう方向で国を建て直すかということについて、総理から提示があったもの。「課題先進国」日本ということで、わが国は少子高齢化、財政赤字、インフラの老朽化、エネルギー制約等の多くの課題がある。こういった課題について、実はわが国は先進国であり、中国も、東南アジア諸国も、すぐに全く同じ問題に向かっている。こういう問題を解決する技術・サービスを開発し、それを海外に展開して、特にアジア市場を取り込むことによって経済等の発展を見込むということが、わが国の目指す大きな方向であるということである。

#3

- ・ もう一つ参考になるのが、来年の4月から科学技術基本計画の第5期が始まる。それに向けて、今、科学技術の方向性をどのように設定しようかという議論を真剣にやっているところ。経団連が総合科学技術・イノベーション会議に今年の春に出したものでは、国家像・長期ビジョンをしっかりと見据えるべきだということを強く言っている。2030年までにわが国がどういう国になっていくのかというビジョンをしっかりと作り、その上でいろいろな施策をやるべきだというもの。
- ・ ここにあるように、「2030年までに目指すべき国家像」ということで、私が知る限り、2030年ぐらいまでの国をどうするかという議論はいろいろなところで行われていて、「豊かで活力ある国民生活」「成長国家としての強い基盤」「地球規模の問題を解決する」など、この辺までは大体同じようなイメージ。
- ・ あとは、人口問題をどのように考えるかということ。1億人を守るという設定をするのか、これから下がっていくこと、落ちていくことを基準に議論するのか、ここは一つの論点になるのではないか。

#4

- ・ 長期的なスコープを見ながら、成長戦略（再興戦略）は毎年改定している。そのときの状況に応じて、少しずつマイナーチェンジをしていくということ。
- ・ 一番新しい今年の6月につくられた成長戦略には、大きく分けて二つの柱があり、一つは「未来投資による生産性革命」、もう一つは「ローカルアベノミクスの推進」ということで地域の活性化、この二つが両輪となっている。これは全て既に成長戦略として出されているもので、今日は「ローカルアベノミクスの推進」について少しご紹介する。もう一つの「未来投資による生産性革命」では、今、話題となっているIoT、ビッグデータ、人工知能などが急激に進展していく中で、非常に大きな生産性革命が起きるのではないかとということが真剣に議論されている。
- ・ この二つは、富山県の将来を考える上で極めて重要になるのではないかと個人的に思っており、この二つにフォーカスしてお話しさせていただきたい。

#5#6

- ・ 「ローカルアベノミクスの推進」のポイントとして、「中堅・中小企業等の『稼ぐ力』の強化」「サービス産業の活性化・生産性の向上」「農林水産業における『攻めの経営』の確立」「観光産業の基幹産業化」の四つが、地域の活性化の重要な柱であろうということ。
- ・ そして、地域が成長していくのに政府として何ができるかということ、経営支援体制をしっかりと準備しようということが一つの大きなポイント。中堅・中小企業においても、サービス産業においても、農林水産業においても、しっかりと経営支援ができるようなシステム、組織を、国として地域に位置付けようというのが大きな流れではないかと思う。厳しい財政状況の中で、自立していけ

るための組織づくりが継続的な発展を誘導するためのすごく大きなポイントではないか。

#7

- ・ 特に「サービス産業のチャレンジプログラム」というものが総理主導でつくられた。サービス産業においては、「地域レベルでの支援体制の強化（地域に密着した支援機関を活用）」ということが、重要な位置付けになっている。
- ・ 具体的には、地域の商工会議所等を使うだけでなく、地域金融機関を地域に根差した形でしっかりと活用してもらえるように、国として誘導しようということ。地域金融機関は地元企業に対してではなく、東京などの大都会に出てきて融資等を行っているが、これをしっかりと地域に根差した形に誘導しようというのが大きな流れ。
- ・ 併せて、専門支援人材等を国がしっかりとサポートする形で各地域に支援機関、支援人材を位置付けて、地域の中小企業、サービス業者がうまく働くような仕組みづくりとした。例えば、サービス業においても、農業においても、IT 活用が今後は極めて重要になっていくだろうと思われる。

#8

- ・ いろいろな具体例があるので、少しだけご紹介する。徳島県のある地域の山の中で、高齢のおばあさんが中心になって、タブレット端末を活用して「葉っぱビジネス」を展開しているという例。

#9

- ・ 今の事例は農業とサービス産業との組み合わせだが、もう一つは観光産業のモデルで、青森県の事例。クラウドシステムを使ってネット上に観光案内をしっかりと届けて、そこにアクセスすれば観光案内を全部してくれるというシステム開発の例。

#10

- ・ それでは誰がやるかということで、86 ある国立大学を三つのカテゴリーに分けて、「地域に根差した活動を中心にする大学」、「ある特定分野に集中する大学」、それから「世界のトップ大学として世界と戦っていく大学」に分ける。
- ・ 大学人が活躍できる場はすごく大きい。大学人にはネットや ICT テクノロジーが得意な人間がたくさんいる。そういう方が地元の企業やいろいろな産業と一緒にシステムづくりをするということが、一つの大きな方向性ではないかと思っている。

#11

- ・ サービス産業だけでなく、製造業等も含めて、地域のイノベーション拠点として、公的機関、公設試、あるいは大学が中心になって地域を活性化していくためのセンターをつくるという施策を誘導している。富山県の公設試や富山大学が地域のイノベーションの核となるための誘導を、国としてしっかりやっていくということ。

#12

- ・ これは徳島大学の事例。徳島大学には産学連携担当の教授がいるが、地元の阿波銀行の方と一緒に阿波銀行の紹介で地元の中小企業を回っている。そのような取り組みによって、産学連携が活性化したという事例。

#13-14

- ・ もう一つは「新時代への挑戦を加速する」ということで、インダストリー4.0。私たちが思っていた以上に大きな変革が、今、世界中で起きている。ICT テクノロジーの急激な進展に合わせてコンピューターが非常に進展したことにより、AI や人工知能を含んだロボットなど、いろいろなものが猛烈な勢いで発展していて、世界も注目している。

#15

- ・ これは今年のダボス会議で使われた資料の一つ。いろいろな製品（Physical）とサイバー軍団（Virtual）が組み合わさったところに、新しいビジネスができるということ。ここに世界は大きく向かっている。

#16

- ・ 私が読んだ本に大変興味深いものがあったので、ご紹介しようと思って持ってきたもの。1990～2013年の23年間において、アメリカ企業と日本企業の中で1兆円級の売上高を持っている企業の数を図示したもの。1990年は、1兆円以上の企業が日本では54社、アメリカでは28社あったが、2013年には日本は2倍ぐらい、アメリカは15倍ぐらいになった。
- ・ アメリカの場合はベンチャーが非常にうまく機能していて、ベンチャーがどんどんできているのだと思う。日本でこの期間において1兆円企業になったベンチャーは、楽天、ユニクロ、ソフトバンクの三つしかない。

#17

- ・ もっと注目すべきは、アメリカのシステムでは、もともとあった企業が猛烈に大きくなっているということ。新しくできたのではなく、もともとあった企業が非常に大きくなっていて、その数は日本よりアメリカの方がずっと多い。それはどうしてかということ、もともとあった企業がその分野で大きくなっている例はほとんどなくて、ある分野と違う分野をつないだことによって新しい製品・サービスをつくりだして大きくなったというモデルがほとんど。

#18

- ・ 四半期ごとに株主から評価を受けるような今の時代では、企業は長期的な新しいことにはなかなか投資できない。だからこそ、ベンチャーをつくっている。
- ・ あちこちにあるベンチャー企業の中から、面白そうな企業、あるものとあるものを結び付けるようなことをやっている企業をM&Aで買い込んで、それによって大きくなっているというビジネスモデル。

#19

- ・ これから先、大変革時代において、ベンチャーを育成するような仕組み、制度をつくり、併せてベンチャーを使うという方向性に誘導しなければいけない。
- ・ IoT、ビッグデータ、人工知能など、大きな生産革命が起きているようなものが全部つながっていく。国の産業は、大手はこのような方向にこれからぐっとシフトしていくと思うが、中小企業も合わせてその部分で一緒になって展開していくことが必要。これは大きな変革で、私たちはこれに注目して、政策的にも誘導しようと思っている。

#20

- ・ 第5期科学技術基本計画は来年4月から始まる。今までの第4期までとは根本的に違って、「未来への産業創造・社会変革」ということが打ち出されている。そこに打って出るというか、そこを引っ張っていくような分野に国として投資していこうということを、ど真ん中に持っていこうとしている。

##

- ・ 昨日の内閣改造後初めての産業競争力会議では、アベノミクス第2ステージにおける成長戦略の進め方について話があり、未来投資による生産性革命とローカルアベノミクスの推進によって、今まで述べてきたようなことを着実に進め、これからの長期的な成長に向けて政策を動かそうということ。

##

- ・ もう一つのポイントは民間投資を誘導することです。経済が活性化したことによって、民間の中にかなり内部留保がある。それを新しい分野、成長分野にしっかり投資してもらおう、そのための仕組みをつくろうということで、第1回官民対話が行われている。政府と産業界で投資先の方向性を共有しようということが話し合われている。

##

- ・ 最後に、30年後に確実に言えるのは生産年齢人口が減少すること。今から出生率が急に増えたとしても、明日生まれた人が生産年齢になるのは20年後。明日急に生まれるわけではないので、ここから先、人口増の政策が非常にうまくいっても10年かかる。そして、10年後に生まれた子どもたちが生産年齢に達するのは30年後。
- ・ 30年後、45年後の予想として、生産年齢人口は、最高のときから7割ぐらいに落ちる。これは予想ではなくて、確実。必ずこうなる。ここから先、もしかしたらまた増えるかもしれない。しかし、アベノミクス第2弾の中では出生率1.8が掲げられており、1.8ということは、増えないということ。つまり、今後もこの方向でいくことになるのではないか。
- ・ 生産年齢人口が大きく減っていく中では、女性や高齢者の活躍の場の拡大は当然で（富山県はほとんどの女性が職業を持っているのであまり増えない）、そうすると、外国人労働者を入れるのかどうかということが、今後の政府の議論で、まだ方向性は出ていない。
- ・ 30年後の話をするときには、まずこの部分は前提としてあって、その上でどのような仕組みをつくっていくのかという議論が必要だと思う。

(3) 委員からの発言

(A委員)

- ・ イノベーションというのは、これまで日本では「技術革新」と訳されてきた。しかし、英語の「Innovation」のもとの意味は、アイデアから価値を創造し、大きな変化をもたらす幅広い変革ということだと聞いている。ここには様々な分野の方々がいらっしゃるが、そういった離れた分野同士から画期的なイノベーションが生まれる。
- ・ 日本には経済、文化、科学技術の長い歴史があり、特に新興アジア諸国と比較すると、これほど長期にわたり、いわば文系と理系の両方を育ててきた国はない。しかも、ヨーロッパとは異なる発想ができる。
- ・ 富山の利点を活かす。例えば既に何度も紹介されている北陸新幹線や薬都というのは、ある意味では当然であり、あらためて強調しなくても進展が期待できます。逆に欠点と考えられている点にも目を向けたい。大部分の人は「これは失敗だ」と思って思考停止してしまうが、そのような部分で「その手があったか」という発想ができるというのは、私自身も、私の部下も、たくさん経験していること。
- ・ 例えば「少子高齢化を乗り越え」ということがよくいわれるが、このような表現には、問題を何とか避けたいという発想があるのではないか。逆に、少子高齢化だからこそうまくいくというアイデアがあり得る。日本はこれまで公害、交通渋滞、災害、あるいはエネルギー問題といったさまざまな欠点に立ち向かって解決してきた、課題先進国というよりも課題解決先進国。富山だからこぞできるようなことを、皆さんとともに考えさせていただきたいと思う。
- ・ ここには富山県の経済、文化、科学技術といったさまざまな分野の方々が集まっている。異分野融合で素晴らしい未来への展望、ビジョンが開ける。

(B委員)

- ・ この行間になじみ出ている考え方で重要なのは、「発展」を追求していくということ。発展というのは development で、これは envelope の反対。つまり、「包み込む」の反対ですから、開いてあること。それは卵が幼虫からさなぎになり、成虫になるように発展していくということであって、外から圧力を加えて変形するというのは発展ではない。例えば「木が机に発展した」とは言いません。この富山県に内在しているさまざまなものを発掘して、それを開花させていこうというスタンスが見えるので、この視点を伸ばしていただければと思う。
- ・ また、知事に私の研究会で「富山湾」からの地域づくりについて発表いただいたが、この案は経済と文化という複眼的な視点から成り立っている。経済 (economy) というのは、われわれの定義では、人間が自然に働きかけて、人間が生存していくために有用なものに変えていくという行為だが、そういう生産活動に対して、文化というのは生活様式。生活様式と生産活動を、うまくバランスを取って、活かしていくことが重要ではないか。エコノミーというのはオイコス (oikos) とノモス (nomos) で、エコロジーというのはオイコスとロゴス (logos) なので、環境に通じる。今、ヨーロッパでやっている地域再生の合い言葉は、環境と文化。ストラスブル等々には多くの研究所が集まってバイオが花開いて、本当にここに住みたいというような美しい都市をつくり上げている。したがって、経済と文化、環境と文化といってもいいが、これを、ほどよくバランスさせていくという視点は伸ばしていただければと思う。
- ・ 人間づくり、人づくりだが、私たちがこれから知識社会の方に行こうとすると、人間の筋肉系統の能力よりも、人間の感情も含めた神経系統の能力が必要となってくる。子どもたちが富山で育ちたいと思うような地域づくりをしていくと、新しい知識産業の芽が萌出してくると考えた方がいいのではないか。
- ・ ハーバードの教授の定義によれば、地域力は二つから成っているとされている。一つは社会の構成員の人的な能力。もう一つはソーシャルキャピタル。人間が惜しみなく結び付くことによる、地域社会の凝集力。この二つで決まるといわれている。幸いなことに、富山県はこれが全部高い。つまり、優秀な、田中さんのような人も出てきますが、それだけではなくて人的な結び付きが非常に高いということ。日本の社会ではこれが完全に崩壊していて、ファミリーレスな社会というか、ファミリーがなくなっている。ファミリーの定義は食事を同じくする者ということだが、食事を同じくしていないという状況になってしまった上に、友人やコミュニティの力が弱くて、無縁社会になってしまっている、知識は惜しみなく与え合わなければ発展しない。そういう資源が富山県にあふれ出ている。それを活かしていくという視点が重要ではないか。
- ・ 私の恩師の宇沢先生はルネサンスという言葉を使うが、富山から新しい人間主義のルネサンスをつくり上げていくことが重要ではないか。それが結局、観光に結び付くわけです。観光の「観」は悟りを開くという意味で、「光」は明るい希望を意味する。従って、観光というのは、明るい希望を見て悟りを開くということ。そのような悟りを開かせてあげることについても、富山県にはその資源があふれ出ていると感じている。

(C委員)

- ・ これからは間違いなく、特徴ある自分たちの強みを明確に示さないと、国からのサポートも得られないし、残れない。富山県にはいろいろな強みがあって、それぞれみんな素晴らしいが、それを長期的な視点で見たときに、どこが一番なのかということになる。私は富山県は地域的に世界への窓口になれるのではないかと考えている。今はそんなに世界に近いわけではないが、地域的に見たときに、いろいろな形で世界とつながれるところではないかと思う。

- ・ 東南アジアとの物産展なども実施されているが、すごく大きな方向性になるのではないかと。わが国は必ず、地域がグローバルに世界とつながっていくことを求める方向に行く。そのときに、いち早くそのような大きな方向性、ビジョンを富山県が持って、いろいろな施策を集中していく。もちろん観光もそうだが、いろいろ作っておられるもの、あるいは農産物も含めて、世界とつながって発展していくという大きなビジョンを掲げて、政策をぐっと集中していくと、中央政府から見て、富山県の一つの大きな方向性としてすごく分かりやすく、良い方向ではないかと思うので、検討していただく価値はあるのではないかと。

(D委員)

- ・ 不易と流行というように考えれば、30年後に何がどうなるかというのは、一つの流行、変動に属すること。しかし、それは第一概念として不易というものがあるから、流動というものが考えられる。それでは不易とは何かというと、例えばA委員が今おっしゃった価値の問題にしても、意外性の発見が価値を生んでくるということだったと思う。意外だと思うということは、通念があるから意外だと思うわけであって、そのような相対的な考えの発言があり、大変参考になった。
- ・ B委員のおっしゃった経済と文化の関係も、補完という経済用語、相補い、全うするという経済概念があるが、今、それが非常に大事なのではないかと。簡単に言うと、パンにバターを塗ると非常においしいというのは補完の関係で、パンの味とバターの味が合って、そのようなものが出てくるわけであるが、レストランに行くと、「ライスにしますか。パンにしますか」と言う。これは各一であるから、補完にはならない。そのように考えると、まさに補完し合う関係として、期待されるべき富山県とは何かということ、それは私の言葉で言いますと、それぞれの土地の「大地力」というものであると考える。
- ・ 富山の「大地力」というのは何かというと、富山の発展や海外戦略とおっしゃった件だと思うけれども、例えば北前船がここを一つの本拠地としていて、非常に発展的なものが定期的に蓄えられていった。あるいは、日本海学会というものができていて、日本海に直面した対岸のようなものが視野に入っているのがこの土地である。何をさておいても、私は富山の「大地力」とは何かということを考えるのに尽きるのではないかと、そこからの発展があると思う。
- ・ それはどういうものかと言うと、江戸時代にはかつて藩学というものがあり、各藩が非常に調和的な文治というものをしており、あの政治形態が、今、大変見直されていると思いますが、その中で藩学というものが伝わり、それが講学館という学校としてあったわけだが、そのような藩学を継承したような県学、県の学問をこれから十分にしていくことで、今、存在している「大地力」、不変なるものが見えてくる。その一つとしておっしゃったのが海外戦略、発展性というものだと思う。
- ・ そういうことから考えると、今、とかく問題になるのは「動き」というもの。その変わるものの中で、変わらないものもある。それを発見して初めて変わるものが存在するわけで、これを見つけることが、今、最大の義務ではないかと考える。
- ・ それは一つの文化力にもなるわけで、例えば私は文化というものの一番の中心は「教育」だと実感している。教育こそが全ての根幹になっていくわけで、モラルあるいは精神というものをつくる。何をやるかを発見する。その中で、富山の経済はどうなるのか、あるいはそれがどのようなグローバルリズムとしての価値を発見していくかということになるのだと思う。変動を考えるということは、同時に不変なるものを探っていく時代で、その一つとして「県学」というものを立ち上げて、それをどのように考えるかということが、まずは何を置いても大事。その上でどのように変動するかということ、それを考えることが重要。

(E 委員)

- ・ 産業面で見ると、生産年齢人口の減少は、地域を支える経済力という意味では、非常に大きな課題。それを解決していくためには、県内全域が社会増になるということは想定しがたい。ある程度地域間で格差、強弱を付けていかざるを得ないのでは。
- ・ 労働人口が非常に逼迫している。そういう中で、県内には個人企業を中心に、どちらかという事業規模の小さい企業が多く存在している。中規模企業への統合化といった動きもやっていかなければいけないのではないかと。労働環境の整備や次世代育成にもプラスのところが出てくるのではないかと。

(F 委員)

- ・ この間、石井知事とインドネシアのミッションに行ってきた。良いものを作れば東南アジアに売れるけれども、東南アジアの各国が作れるようなものは要らないというスタイル。それを克服するためには、やはり研究力や教育などが重要。
- ・ マレーシア人の方に「また来られ、待ってっちゃ」と言われたとき、何か富山大学に留学されて、それから現地に行かれたという。富山の文化がそういうところに活かされているのだなと感じた。この輪を広げていかなければいけないと実感した。

(G 委員)

- ・ 少子高齢化、人口減少にいかにか歯止めを掛けるかに尽きるのではないかと。今後の長期目標の中で人口減少にどういう歯止めを掛けるのか、また、定住者をどうやって増加するかという、この二つを考えていくべき。
- ・ その具体策として、富山県主導の企業誘致の促進、政府機関の移転などが重要ではないかと、今後の目標として挙げられてもいいのではないかと。
- ・ 富山県の強みはいろいろあると思うが、富山県は介護支援と子育て支援が日本一なのだということアピールしていけば、住みたい県と言ってもらえることにもつながる。

(H 委員)

- ・ ステークホルダーの皆さんが Win-Win になるような民主主義をやらなければいけない。日本には日本の、アメリカにはアメリカの、ヨーロッパにはヨーロッパ、アジアにはアジアの形がある。そこのところを分かった上で、これから展開をしていかなければいけないという話があった。そういう中で、富山県はどうやっていくか。
- ・ 富山は良い点がたくさんあるけれども、その良い点をさらにとがった世界一の良いものにどうやってしていくか。理想論で言えば、みんながアイデンティティとして「富山はこういうところだね」と言えるように持ち込みたい。

(I 委員)

- ・ 学生に「30 年たったら、あなたたちが今のあなたたちの親の年齢になる。そのときに、自分の子どもたちがどういう社会環境の中で、またはどういう地域で暮らしてほしいと思うか」というところから具体的に考えてもらうようにしている。
- ・ 何をつなげていきたいのか、何を私たちは次世代に残していきたいのかということ考えたときに、まずは命がつながっていくということが大前提だろう。
- ・ 今あるさまざまな環境を現時点の空間軸だけで考えるのではなくて、時間軸でも考えないと、後に負の遺産を残すような環境をつくってしまうこともある。
- ・ 富山という地で、それこそ強みも弱みも含めて、よくピンチをチャンスに変えていくというのが、今の少子化の時代の中でしっかり人が育ち、命をつないでくれる人たちを増やしていくことが大

切だと思う。

- ・ コミュニケーションが薄くなっているということは、若者を見ていると端々で思う。

(石井知事)

- ・ 最初に橋本先生が、30年というのはぎりぎりの微妙な線だとおっしゃった。30年先の世代ということと、これから一生懸命出生率を上げて実現するのは5年、10年かかる。その子どもたちが一人前になるには20年かかる。ですから、やはり30年ということの一つ視野に置いていかなければいけないと思う。
- ・ 地方創生の計画は5年であるため、10年先、20年先、そして今の論理から言うと30年先も視野に置いた方がいいのではないかと考えた。
- ・ そのために、20代後半、30歳代、40代前半の皆さんが集まって、平均年齢にしたら35歳くらいの人たちに30人ほど集まってもらった。そして、青年部会をつくって、「あなたたちが30年後にはわれわれの年になっている。富山県、あるいは日本をもっと良くする、魅力あるところにするにはどうしたらいいか、あなたたちも考えてほしい」と、このようにさせていただいた。
- ・ 私が最近あらためて痛感しているのは、富山の発展や新たな飛躍ということを考えると、何としてもASEANやインドなどの国々と付き合っていきたいと思っている。
- ・ 富山県が今あるいろいろな良いものをしっかり継承して発展させていくには、やはり世界の中で今一番勢いがあるところ、頑張っているところと交流して、一緒に発展していくという戦略を取らざるを得ない。そのときに売り込む魅力がないと、富山県でなければならない技術や経済がないと、残念ながら相手にしてもらえない。例えば「あのYKKのある富山県ですか」「医薬品産業の富山県ですか」というところから大臣や次官も会ってくれる。やはり経済についてはそういうことを考えて、富山県の強みをもっともっと磨いて、インドも、インドネシアも、ASEANの国々も、アメリカやヨーロッパも一目も二目も置く県にしていきたいと思っている。
- ・ 同時に、富山県の製造業はぜひ発展させなければいけないのだが、併せてもう少し文化力を感じさせるような産業も育成して、「クリエイティブな職場環境があって、そういう仕事ができるのなら、やはり富山で住みたいな」というふうになっていかなければいけない。
- ・ また、良い教育をすること、人づくり、子育て日本一、高齢者対策それぞれ全国でもモデルといわれるような県にして、それを強みにして、若い人も、女性も、あるいは東京あたりである程度の年齢になって「やはりもっと違った人生を生きたいな」と思った人が、富山に行こうという気持ちになるような県にしたい。
- ・ この長期ビジョン懇話会でもいろいろなご意見が出ると思うのですが、今日、皆さんのお話を聞いていて、何となく私が日頃考えていることと、委員の皆さんがおっしゃっていることは、やはりだんだん同じところに収れんしていくのではないかと。

(J委員)

- ・ イノベーションというのは、あるものとあるものをくっつけて新しいものを考えるということ。それを見つける、セレンディピティ (serendipity)。これが非常に大事。
- ・ 今、産業用ロボットあるいは工業用ロボットが生産労働人口の18万人ぐらいを助けている。まだまだこれから知のロボットが出てくる。人口問題はかなり解決するし、そして高度なものを作っていくことができると思う。
- ・ 優秀な移民を入れる体制も整えなければいけない。

(K委員)

- ・ 富山県は江戸時代から支藩、小さな県で、これをばねにして売薬を考えた。ピンチをチャンスに変えるというのは、富山県の DNA。この強みを生かしていかなければいけない。
- ・ 銀行や商工会議所など、第三次産業にはまだまだ効率化の余地がある。そうしたものを効率化し、ロボットでも人工知能でも使って、生産性を上げていくことが重要。
- ・ 30年の計画というのは良いと思う。というのは、夢であり、ミッションでもあるから。なるかならないかはやってみなければ分からない、それを5年、10年と途中で見ていくということだろうと思う。

(L委員)

- ・ 私は社長、会長という立場を辞めるときに、コミュニケーションを大事にしてくれという話をした。コミュニケーション能力を持っている人は随分違う。

(M委員)

- ・ どのようにして富山県を若い人たちにとって魅力あるところにするかということにかかっていると思う。その辺の具体策をぜひ考えていただきたい。
- ・ 健康や病院、あるいは生活福祉が不可能になってくる町や村も出てくるのではないかな。そういうことを今から考えていかなければいけないだろう。
- ・ 電力自由化は大きな課題である。

(N委員)

- ・ 今、東京中心から地方主義になっているが、みんな似たような話が多い。富山だからというユニークな施策を明確にすべき。
- ・ 海外から日本に人が入ることをまだ全く考えていないと言うけれども、それを真剣に考えなければ、マイナスになっていくだけ。国も技術系はビザを8年ぐらいに延ばすとか、いろいろなことを言っている、「富山で生活したい、ユニークだ。あなたもどうですか？」となるということをお願いしておきたい。

(O委員)

- ・ 俳句は違う概念を二つ寄せないと、なかなか成立しない世界。重ねて置く、重置法というらしいが、違うイメージをくっつけて大きな力を持つというのは、非常に日本的な考え方ではないか。われわれ日本人の DNA にある大きなポテンシャルを逆に世界に発信していけるのではないかな。
- ・ 先ほど吉田忠裕さんが日本人だけを対象にして30年後を考えていいのかとおっしゃったが、自分のアイデンティティというか、日本人、あるいは富山の人間だというアイデンティティをどうやってプレゼンできるかという問題にも結び付くと思う。

(P委員)

- ・ 富山県をどういう県にしたいのか、キーワードとしては、やはり一向一揆の精神といいますか、あるいは福沢諭吉が言ったような「独立の気概」といいますか、そういうものが必要なのだろう。富山県人として動いていきたいということ。「俺たちがトップになるのだ」という気概が必要だと思っている。

(Q委員)

- ・ 30年後の芸術文化を考えたとき、小さい頃からの積み重ね、子どもたちの芸術文化の環境を整えるということが一番ではないかなと思う。その中でも、小さい頃から本物に触れるということは本当に重要なことだと思う。
- ・ 中学、高校に入るときにせっかく続けてきたものをやめるというところもあるので、富山でも

専門の分野が学べるような環境になればいいのかなと思う。

- ・ 指導者のレベルアップということ、また、ホールなど発表する場はたくさんが、創造やそういう教育、訓練をする拠点が無い。

(R委員)

- ・ やはり教育の大切さということがあります。まず一番大事なのは家庭環境というか、親の教育が一番大切だと思う。母親になる人、女性をきちんと教育をしてもらいたいと思う。
- ・ 富山の良さを見直すには、やはりいっぺん外へ出てみないと分からないのではないかなとも思う。外へ出られても結構だが、またきちんと戻ってくるということ。小さいときからの教育、しつけが一番大事ではないかなと思う。

(S委員)

- ・ 30年では長いとか、15年だとどうかなど、いろいろありますが、それにはあまりこだわらなくても。少子化に少しでも歯止めを掛ける効果が出るのは30年後。30年ぐらいのことをやはり一つのめどにしていく。
- ・ 生産年齢人口の問題について、生産年齢人口の15歳というのは、何を以てか。15歳でカウントするのは非現実的ではないか。今の65歳を70歳までにして、そのためにはどうするかを考えた方が現実的ではないか。
- ・ 世界のデータになっているものとか何かではなくて、日本は日本の、富山は富山独特の出し方をしながら、実態をしっかり把握することが大事。

(T委員)

- ・ 青年部会をつくられるのは大変良いこと、富山県のビジョンということですので、やはり夢のあるビジョンであってほしい。若い人たちの実現可能な夢になってほしい。

(U委員)

- ・ 少し言わせていただければ、やはり教育が非常に重要だと私は思っていて、教育なくして経済発展も絶対あり得ないと。人づくり、人がどう生きるかということだと思っている。例えば英語でIT、ICTとありますが、ITならいいけれども、ICTになると、最近、ICT教育等でコミュニケーションのところまで全部コンピューター、テクノロジーとなると、日本の教育と合わないよねという発想が出てきている。ですから、Information Technologyで止めておいて、それをInformation Communication Technologyと言ったら、別の日本の概念があるでしょうと思ったりする。
- ・ 子どもたちにどこまでテクノロジーを持たせるかということは非常に重要で、子どもには俳句と芸術とスポーツを大事に教えた方がいいのではないかなということも面白いかなと思って拝聴していた。また詰めていって、若者の意見も入れていただければいいのではないかな。

以上

(速報のため、事後修正の可能性あります)